

教育分担者としてのティーチング・アシスタント

—平成23年度弘前大学 TA 研修会の報告を兼ねて—

21世紀教育センター高等教育研究開発室 田中正弘

はじめに

我が国では、ティーチング・アシスタント(TA)は教員の「お手伝いさん」としての役割を担っていると一般的に考えられています。しかし、この考え方は、少し勿体ないように感じます。TAが「教育分担者」として主体的に活躍できる機会が与えられれば、大学教育の改善を大いに促進させるかもしれないからです。このことについて、北野秋男(2006:83)は、下記のように指摘しています。

大学には教職員、院生、学生など豊富な人的資源がある。この「人的資源」の活用や人的交流の活性化こそが、大学教育の改善につながる重要なキーワードではなかろうか。また、我が国の大学教育のあり方は、依然として「一人の教員」が「多くの学生」を指導するという伝統的な教授スタイルを保持したままである。この点、複数教員制やアシスタント制の採用は、我が国の大学教育における伝統的な教授スタイルを根底から変革する可能性を秘めている。

とはいえ、TAが教育分担者として教育活動に関わるのであれば、それに見合った知識や技能が無ければ、困ったことになりかねません。このため、TA研修会の必要性が問われるようになってきました。例えば、全ての大学が7年以内に一度受審しなければならない認証評価の評価基準の中に、TA研修会を適切に実施しているかを問うものが含まれることになりました。

そこで本学においても、2012年3月19日(月)の13:25~17:00に、付属図書館ラーニング・スクエアで「平成23年度弘前大学 TA 研修会」を開催しました。当日は6名の発表者と、翌年度以降にTAを担当することが決まっている院生・学生20名、および教職員14名が参加し、活発な議論が行われました。

平成23年度弘前大学 TA 研修会

TA研修会の目的は、TAを務めた大学院生の経験を発表し合い、課題を共有することで、彼らの教育支援能力の向上を期待するとともに、望ましいTA制度の在り方について教職員も交えた議論の喚起を図ることです。

研修会は3部構成になっていて、第1部は「院生講師」(院生講師制度の詳細は、拙稿「院生講師(Graduate Student Instructor: GSI)制度の可能性—2011年度第1回21世紀教育センターFD



講演会の報告を兼ねて—『21世紀教育センターニュース』第19号, 1-2頁を参照してください)としての経験談を、4名の院生に発表してもらいました。

院生講師として英語 IA を担当した教育学研究科の小又一城君は、文法的な説明や机間指導、テスト作成などを分担しました。彼は、講義を組み立てる上で、下記の三点を基本に据えたとのことでした。

- 英語を楽しめるような講義の構成
- 知識の再構成
- 英語 II へ進むための下地作り

特に、講義を楽しんでもらうことで、英語の学習への苦手意識を取り払うことに重点を置いたこと、および自分の経験を織り交ぜて、次の段階に進むのに必要な知識の基盤作りを実践できたことが、自らも楽しめる講義になった要因だと自己分析していました。

次に、院生講師として数学の基礎 IIB の机間指導や問題解説などを分担した菅野巧君は、苦労した点に、解答を丸写しする学生が多かったことから、理解度を確かめるための説明を求めることが難しかったことを挙げています。その一方で、楽しかったこととして、普段はふれあわない他学科の学生と交流できたことや、教えることで、数学のおもしろさを改めて知ることができたことを説明してくれました。

三番目の発表者として、物理学の基礎 IIB の指導を院生講師として分担した成田翔君は、大人数の講義に戸惑ったとのことでした。体験済みの塾講師と異なり、板書の大きさや声の大きさに気をつけないと、後ろの席の学生に迷惑を掛けてしまう



ことを、自らの失敗談として話してくれました。また、自分の利益になったこととして、物事を分かりやすく伝える技術はとても大切なことに気がついたことを指摘してくれました。この指摘は、大学院生に TA を体験してもらう重要な教育成果だと思われそうです。

第1部最後の発表者として、化学の基礎 IIB の解答解説や小テストの実施などを院生講師として分担した浅井伸太郎君は、講義中に学生の方を向いて話すのに苦労したとのこと。それから、短い時間に簡潔に指導するためには、どうすればよいかを考えるようになったことが、自らの成長だと振り返っていました。また、修士課程のカリキュラムに院生講師制度を組み込むことも提案してくれました。

第2部は、TA としての経験談を2名の院生に発表してもらう時間にしました。最初に、保健学研究科の山内可南子さんが、TA の経験を述べてくれました。彼女の主な担当業務は、実験の準備・片付けですが、講義の補助なども担当しており、保健学の専門用語が飛び交う中で、戸惑っている学生に、その語意を説明してあげることの重要性など、TA に従事する予定の学生にとって示唆に富む話しが盛り込まれていました。

二人目の発表者である西村唯一郎君は、情報 I・II の TA を担当した経験談を話してくれました。情報の科目の教育支援で難しいことは、学生の能力に大きなバラツキがあることで、コンピューターを既に高度に使いこなせる学生がいる一方で、全くの初心者もいるために、個別指導が欠かせないそうです。とはいえ、この個別指導はやっかいで、学生がどの操作で躓いているかを瞬時に把握するのはとても難しいことから、はじめの操作から一緒にたどってみる必要があるとの重要な指摘がありました。情報の TA を担当する予定の学生にとって、とても役に立つ指摘でした。

第3部は、参加学生(およびメンター役の教員)

が三つの班に分かれて、ラウンドテーブル形式で「TA の経験から学んだこと」という題目を話し合いました。そして、30 分間の話し合いの結果を、各班 5 分ずつ、発表しました。ここで述べられた意見の中には、下記のようなものがありました。

- TA にとって大変なことは、疑問があっても、手を挙げて質問をせずに、立ち止まってしまう学生への対応です。学生に積極的に話しかけて、質問をしやすくする環境を整えたり、理解度が低い学生にゆっくりと時間を掛けて説明してあげたりする必要があります。
- 机間指導では、一方的に教えてあげるよりも、学生と一緒に考えてあげることが、彼らの理解度を深めるのに、とても有効だと思います。
- 実験で期待していた結果を得られない時には、TA が正しい手順を直接見せてあげるよりも、学生と一緒に「悩んであげる」ことが大事だと思います。言い換えると、TA は学生に失敗の原因を考えてもらうようにすることが、重要な役割だと思います。

まとめ

TA 研修会で、院生・学生による主体的で積極的な議論が展開されたことは、とても嬉しい誤算でした。このよい試みを来年度も継続していきたいです。

【参考文献】

北野秋男 (2006) 「日本のティーチング・アシスタント制度 大学教育の改善と人的資源の活用」東信堂。

